

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	植民地体制下のサハラにおける領域支配の展開とその社会的影響
氏名 Name	天野 佑紀
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	文学研究科・現代文化学専攻・博士課程3年
渡航国 Country	米国
渡航日程 Travel schedule	2022年9月5日～2023年5月18日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究は、19世紀のアフリカ大陸における植民地分割とそれに基づく領域支配の展開が、大陸北部に位置するサハラ砂漠（以下、サハラ）の社会に及ぼした影響を明らかにするものである。とりわけ、本研究では現在のアルジェリア国家のなかのサハラ地帯（以下、アルジェリア・サハラ）の事例を中心とするが、植民地化以前／以後を横断して当該地域社会の歴史を描くためには、植民地支配者側が作成したフランス語史料に加えて、在地のアラビア語史料を検討することが必要となる。本渡航の最大の目的は、コロナ禍の影響でサハラ現地での調査が困難な状況が続くなかで、米国のアフリカ史家たちが収集してきたアラビア語の史料・文献を収集し、それを実践的に読解する訓練を積むことであった。

成果 Outcome

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLA）歴史学部に博士客員研究員として所属し、報告者とフィールドを同じくする歴史家の Ghislaine Lydon 氏の指導のもとで、以下の研究活動に従事した。

1) アラビア語史料・文献の収集

当初の計画通り、北西部アフリカ諸国で刊行されたサハラ関連のアラビア語史料・文献を収集し、それらを読解する訓練を積んだ。とりわけ、報告者の研究対象である19世紀のサハラ中部（現在のアルジェリア南部、リビア、ニジェール、マリ）を中心に活動した有力な商人系ユーシャウ家の書簡集（Bashīr Qāsim Yūsha', ed., *Ghadāmis: Wathā'iq Tijāriyya wa Tā'rikhiyya wa Ijtimā'iyya, 1228-1312*, 1982; id., *Wathā'iq Ghadāmis: Wathā'iq Tijāriyya wa Tā'rikhiyya wa Ijtimā'iyya, 949-1343*, 1995.）を、これまでの研究で収集済みだった欧語史料と突き合わせて検討した。これにより、たとえばスーフ地方（現在のアルジェリア南東部）を拠点にキャラヴァン取引に従事した集団であるスワーファが、1854年にフランスの支配下に入ったことで法令上は禁止されていたはずのサハラ奴隷取引を継続しており、その販売先として権力統制がより脆弱な地域——とりわけアルジェリア南部やチュニジア南部——を選択していたことなど、アラビア語史料だからこそ推定可能な、かつ博士論文の重要な論点となりうるいくつかの事柄を実証するための材料を揃えられた。

また、日本やフランスの図書館には所蔵がないサハラ取引にかんするアラビア語の二次文献を閲覧し、英語・フランス語文献との論点の違いや、自身の研究史上の位置づけについて省察した。そのなかでも、サハラ越え取引にかんする論考を数多く収録してきた *Majallat al-Buḥūth al-Ta'rikhiyya* 誌を閲覧できたことで、発行元であるリビアへの入国が難しい現状における「第三者国」たる米国への留学のメリットを実感した。さらに、UCLA に研究員として登録したことの副産物として、同大学のデジタルライブラリーへのアクセス権を取得し、京都大学には所蔵のない大量の英語・フランス語文献を DL した。

2) 米国のアフリカ史研究者との交流

2022年11月16日～20日の日程でフィラデルフィアに出張し、African Studies Association Annual

Meeting に聴講者として参加した。その際に連絡先を交換した研究者とは、たとえば学外で開催されたセミナーへの招待や史料の所在などについてメールで教示を頂くといった形で現在まで交流が続いている。常にコロナ禍が付いて回る院生生活を送ってきた報告者にとって、国際学会に「対面」で参加し、海外に学術的なネットワークを広げることの恩恵を感じられるまたとない機会となった。

3) サハラ史セミナーへの参加

春クォーターから、受入研究者である UCLA の Ghislaine Lydon 氏が開講するゼミナール、「The Sahara in African History」に参加した。ゼミの各セッションは、事前に指定される 3-4 点の読書課題について、ゼミ生と Lydon 氏とで議論するという形式で行われた。そこには、アフリカ史専攻の院生のみならず、西洋美術史や（地域研究系の）アフリカ研究など、さまざまなバックグラウンドをもつ院生も参加しており、彼ら／彼女らの知見を活かしたコメントには瞠目することが多かった。Lydon 氏によれば、前年度までの同ゼミは広い意味でのアフリカ史／叙述について議論するものだったが、今年は「Sahara」という特定のトピックを扱う「実験」を試みたとのことである。他例に漏れず、報告者はコロナ禍のため留学開始時期を遅らせた身であるが、結果として、自らの専門分野に直接かかわるテーマを大々的に扱うゼミに参加し、その第一人者である Lydon 氏の指導を直接受けられたことは、まさに僥倖であったと考えている。

今後の展望 Prospects for the future

まず、1) で収集した史料・文献の読解を優先的に進めるが、渡米中に分析が一段落した小課題については、成果発表の段階に移行する。その第一歩として、帰国後すぐにドイツに渡航し、ケルンにて開かれる European Conference on African Studies において、アフリカにおけるヒト・モノの移動性とそれに対するアプローチの刷新を共通論題とする「New approaches to transport in Africa」というパネルに参加し、上述した植民地期のスワーファのキャラヴァン交易にかんする口頭報告を行う（報告要旨は採択済み）。そこで得たコメントをもとに、すでに準備中の原稿に加筆・修正を加え、*Cahiers d'études africaines* や *Revue des mondes musulmans et de la Méditerranée* などのフランス系の学術誌に投稿する。

UCLA の人文社会科学系図書館 Charles E. Young Research Library

